

【特集】 島嶼国の将来を担う人材の育成

太平洋・カリブ学生招聘

太平洋若手リーダー招聘

第8回国際協力懇話会

前駐中華人民共和国特命全権大使 木寺 昌人氏

【大使の声】

タニア・ラウマヌルペ・タラフォリカ・トゥポウ閣下（トンガ王国）

クレメント・フィリップ・リカード・アリコック閣下（ジャマイカ）



一般財団法人国際協力推進協会

理事長
佐藤嘉恭

力の現場における能力の向上に努めている。外務省幹部による毎月の「早朝講演会」を傍聴し外交の現場に接する機会となっているが、こうした経験が学業の単位ともなっている。これまでに参画した学生の意気込みは高く、また、積極的であり、日本の将来を担う人材として有望視している。

財団の事務局には、前記二大学のほか早稲田大学・同大学院国際基督教大学、慶応義塾大学、津田塾大学、学習院大学などの学生にも参画して貰っているが、学生たちの若い力の貢献は大きい。

最近感じたことを申せば、オバマ大統領の広島における演説は歴史に記録される真にすぐれた内容であり、日本人の心に響き、感動を与えた。米国の立場を理解し、日米関係の重要性を訴える日米両国の共通の課題を認識することにより、演説に対する理解は一層深まる。

次の世代を引き継ぐ若人が、相互理解を深める努力を重ね、多くの人々の知見に耳を傾け、経験を蓄積し、日本の責任を果たして頂きたい。

財団はインターン制度の一層の充実をめざしてゆく。
(2016年6月2日記)

今号の表紙写真

「Lagoon Light 3」
ミクロネシア連邦チューク環礁
撮影者：フロイド・タケウチ
Photo courtesy
Floyd K. Takeuchi/Waka Photos

2016年上半期のAPICの主な動き

1月4日	太平洋カリブ学生招聘を実施（～31日）
1月20日	第321回早朝講演会（外務省 外務事務次官 齋木昭隆氏）
2月2日	上智大学より3名のインターン生を受け入れ（～3月1日）
2月17日	上智大学インターン生がアジア開発銀行東京事務所を訪問
2月18日	第322回早朝講演会（外務省 政府代表兼日露関係担当大使 原田親仁氏）
2月18日	上智大学インターン生が駐日トンガ王国大使館を訪問
2月21日	太平洋若手リーダー招聘を実施（～28日）
2月25日	上智大学インターン生が駐日ジャマイカ大使館を訪問
3月17日	第323回早朝講演会（前駐ドイツ連邦共和国特命全権大使 中根猛氏）
4月21日	第324回早朝講演会（前駐イラン・イスラム共和国特命全権大使 羽田浩二氏）
5月19日	第325回早朝講演会（前駐シンガポール共和国特命全権大使 竹内春久氏）
5月30日	第8回国際協力懇話会（前中華人民共和国特命全権大使 木寺昌人氏）
6月16日	第326回早朝講演会（外務省 前外務審議官（経済）長嶺安政氏）

CONTENTS
特集

島嶼国の将来を担う人材の育成

	3 太平洋・カリブ学生招聘
	9 太平洋若手リーダー招聘
13	第8回国際協力懇話会
14	ザビエル留学生
	17 大使の声（1） ジャマイカ大使館 クレメント・フィリップ・リカード・アリコック閣下
	19 大使の声（2） トンガ大使館 タニア・ラウマヌルベ・タラフォリカ・トゥポウ閣下
	21 APIC 関係者インタビュー 坂本吉弘 理事 一般財団法人安全貿易保障センター理事長 (元通商産業省 通商産業審議官)
23	上智大学インターンシップ
27	インターン生参加プロジェクト
29	早朝講演会・新年度事業計画

※記事本文に掲載されている役職・機関名は、事業実施時点における名称を採用しています。

太平洋・カリブ 学生招聘

1月4日から30日にかけての約4週間、太平洋島嶼国から8名、カリブ諸国から8名の計16名の学生が来日し、日本に対する理解を深めました。

参加学生の出身国・地域	参加学生数	参加大学
ミクロネシア連邦	2名	College of Micronesia - FSM
パラオ共和国	2名	Palau Community College
マーシャル諸島共和国	1名	College of Marshall Islands
フィジー共和国	1名	University of South Pacific
サモア独立国	1名	National University of Samoa
ソロモン諸島	1名	The Solomon Islands National University
バルバドス	2名	University of West Indies Cavehill Campus
ジャマイカ	2名	University of West Indies Mona Campus
トリニダードトバゴ	2名	University of West Indies St. Augustine Campus
モントセラト	1名	University of West Indies Open Campus
グレナディーン諸島	1名	

写真・1月29日に上智大学で開催されたフェアウェルパーティーの集合写真



滞在中のスケジュール

1/4	招聘学生 到着
1/5	オリエンテーション、講義開始
1/7	ランチタイム・サロン、文化交流行事
1/14	ランチタイム・サロン
1/16	ディズニーランド見学
1/21	文化交流行事
1/23	グループごとの自主活動
1/29	講義終了、フェアウェルパーティー
1/30	招聘学生 帰国

上智大学の主催する短期学修プログラム（Short-Term Study Program）の「日本研究（Japanese Studies）」に参加。1月5日から29日にかけての4週間にわたり、平日は上智大学にて講義を受講しました。

具体的な活動内容

講義は平日の日に中実施され、講義の前後と休日は基本的に自由時間として設定されました。

1月9日 鎌倉観光

鎌倉では高徳院や建長寺（右写真）を参拝しました。昼になると建長寺周辺でグループに分かれて昼食をとり、散策を楽しみました。

1月16日 ディズニーランド見学

ディズニーランド見学は、多くの招聘学生が、滞在中一番印象に残っていると答えた課外活動です。当日は日本人学生

に加えて、ザビエル奨学生であるメアリーさんとリサさんも案内役として参加し、太平洋から来日している学生同士の交流の場となりました。

1月23日 グループごとの自主活動

いくつかのグループに分かれて、新宿渋谷など東京の都心を散策しました。方には招聘学生全員が集まり、スカイリーに上りました。

1月29日 フェアウェルパーティー

プログラムの最終日に上智大学で送別会が開かれました。詳細は本誌8ページに掲載しています。



（高徳院を訪れた招聘学生と日本人学生）

1/4

始動する島嶼国の学生交流

1月4日から30日にかけて、太平洋島嶼国とカリブ諸国からの学生計16名が日本に滞在し、上智大学のスタディー・プログラムに参加しました。平日は上智大学にて英語による授業を受け、週末は観光地を巡りました。

上智大学に設置されている「日本研究」のプログラムでは、「日本の企業と経済」「日本におけるメディアと現代の問題」「日本語」の3つが学習領域として提供されました。各領域における講義にはプレゼンテーションなど学生主体の活動が多く組み込まれており、受講者は独自にインタビューを行うなど、非常に体験的な内容となっています。

授業の合間のランチタイム・サロンや授業後の言語交流会では、上智大学の学生や他の留学生と積極的に交流する姿が見られました。その他にも、和太鼓や書道といった日本文化に触れる機会も設けられました。

鎌倉観光、ディズニーランド見学など、休日には東京周辺の観光地を訪れました。こうした活動には、昨年ミクロネシア短期大学での夏期研修に参加した学生やAPICインターン生も参加し、プログラムを補佐しました。



（建長寺でガイドの説明を聞く学生）



（ディズニーランドでのグループ写真）

(発表会でプレゼンテーションを行う学生)



APIC「太平洋・カリブ学生招聘」の締めくくりとして、1月29日に上智大学にて招聘学生による発表会とフェアウェルパーティーが開催されました。学生らは日本での経験やそこから学んだことなどを発表した後、日本の学生やAPIC関係者との最後の交流を楽しみました。

発表会では16名が4名ずつのグループに分かれ、約1ヶ月間の滞在を通して感じたことや学んだ事について、プレゼンテーションを行いました。発表の会場には、上智大学の関係者（高祖理事長や担当教授、学生）を中心に50名を超える聴衆が出席し、学生たちの発表に耳を傾けました。

発表の方法は様々で、写真を多用したり、動画を作成したり、グループごとに工夫がみられました。大勢の人を前に緊張している様子の学生も見受けられましたが、どのグループでも学生が互いに助け合って発表をこなしており、プログラム全体を通して学生同士の絆も深まったように思います。

4つのグループが発表を終えると、学生一人一人に対して、APICの佐藤理事長から修了証が渡されました。本発表会をもって、学生招待の全日程が終了したことになります。

(佐藤理事長から修了証を受け取る学生)



発表会が終わると、プログラム中の活動に参加した日本人学生らも加わり、フェアウェルパーティーが催されました。

会場では互いに集まって写真を撮り、別れを惜しむ学生の姿が多く見受けられました。

本年度初めて計画されたAPIC「太平洋・カリブ学生招待」は、来年度以降も継続して実施していくことが予定されています。本事業がAPICの使命として掲げる国際交流支援の柱となるよう、さらなる内容の充実を図っていきます。

参加学生の声

西インド諸島大学

キンバリー・ブラウンさん

初めて訪れた日本、上智大学でのプログラムは非常に印象的でした。以前から日本については独自の文化、整った衛生環境、人々の優しさなど多くの点で非常に良い印象を持っていました。今回実際に様々な場所を訪れてみて一生懸命働くサラリーマンの姿、創造的で美しい建造物、遊園地など私が思っていた以上に素晴らしいかったです。

私が最も印象に残っているのは世界中の学生との出会いです。同じトリニダード・トバコの子生にも会うことができました。週末を利用して訪れた鎌倉、東京ディズニーランド、都内観光、和太鼓体験、そして東京タワー、スカイツリーからの絶景は忘れることのできない経験となりました。

私は将来、修士号を取得するために日本に戻ってきたいと思っています。また、日本に友達をもっと作り、東京が第2の家と感じられるようになりたいと思います。今回のプログラムでは貴重な体験をさせていただきました。

最後になりますが、今回のプログラムにご協力頂きました皆様に対して、感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

(本文は英語で学生が書いた感想を和訳したものです。)

参加学生の声

上智大学

金原 弘恭さん



(ディズニーランドにて：右下が金原さん)

観や常識に衝撃を受けながらも、お互いの事を深く理解できたと思います。この感覚は英語の授業や表面的な会話では絶対に経験することのできないものであり、本当に貴重で大切なことを学びました。

そうした中でも彼らがなぜ日本に来たのか、将来何をやりたいのかということと語り合ったときはそれまで以上に盛り上がりました。中には日本のアニメが大好きだからという学生や、将来はエコノミストになって自分の国を引っ張ってきたいという学生もいました。

私の印象に残ったことは、全ての学生が自分の将来を母国の将来と関連させて考えていたということです。自分は母国のために何ができるのだろうか、何をすべきだろうかと常に考えていた彼らは、私の目にとっても大きく、そして輝いて見えました。そうした彼らとともに過ごすことにより、私は自分の未熟さやハンダリー精神の欠如を自覚しました。

今回の体験は私に自分から「異なる世界に飛び込んでいく勇氣」と「新しい価値観」を与えてくれる貴重な経験になりました。こうした経験を与えてくださったAPICの皆様には本当に感謝しております。そして未来のどこかで、また彼らと出会い、語り合えることを楽しみにしています。

今回の体験は私に自分から「異なる世界に飛び込んでいく勇氣」と「新しい価値観」を与えてくれる貴重な経験になりました。こうした経験を与えてくださったAPICの皆様には本当に感謝しております。そして未来のどこかで、また彼らと出会い、語り合えることを楽しみにしています。

今回の彼らとの交流は私が今まで体験した中で最も多様性に富んでいたと思います。それぞれ違う文化を持つ国からやってきた16人の学生たちと過ごした時間は本当に刺激的でした。また今回は大学内での活動だけでなく、土日を使って外へ出かけました。英語が得意でない私にとって不安と緊張の連続でした。

しかし、彼らと過ごす時間が長くなるにつれ、「言葉を超えた絆」を築くことが出来たと思います。

動物園やディズニーランドで遊ぶ中でお互いの緊張がほぐれ、自然と話が弾んでいきました。特に学生たちと自分の国の文化について話し合った時は違う価値



太平洋 若手リーダー招聘

2016年2月21日から28日にかけて、
ミクロネシア連邦、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国の3か国から2名ずつ、計6名の若手リーダーが来日しました。

① パラオ国際珊瑚礁センター最高経営責任者
イムナン・ゴルブー氏

② マーシャル諸島環境保護庁長官
モリアナ・フィリップス氏

③ パラオ共和国議会上院議員
メイソン・ウィップス氏

④ ミクロネシア連邦議員
デイビット・パヌエロ氏

⑤ マーシャル諸島共和国水道公社総裁
ジョセフ・バトル氏

⑥ Ramp & Mida 法律事務所共同経営者
ミクロネシア自然保護基金会長
ケンボ・ミダ弁護士

(右記の記されている番号は、
下の写真に対応しています)



(東松島市役所の職員の説明を聞く若手リーダー)

東松島市役所訪問

宮城

25日

2月

23日

東京

22日

東京

APIC 主催歓迎夕食会

濱地雅一外務大臣政務官表敬



(訪日団を代表してスピーチを行うパヌエロ氏)



(濱地政務官：中央、佐藤理事長：右端、若手リーダー6名)

プロジェクトの概要

本プロジェクトを通じて、ミクロネシア地域3カ国の若手リーダーが日本の国会議員や外交官と議論する場や日本の技術を学ぶ場、日本についての理解を深める機会が設けられました。

日本のリーダーとの交流

プログラムの前半となる22日から23日にかけて、秋葉剛男外務省総合外交政策局長および濱地雅一外務大臣政務官を訪問し、大島理森衆議院議長を表敬、関係国との議員連盟を構成する古屋圭司氏、石原伸晃国務大臣、城内実元外務副大臣らをはじめとする多くの国会議員と会談を行いました。日本の政治・外交において活躍されている方々との意見交換を通じて、今後の太平洋島嶼国と日本の協力関係促進の重要性について再確認しました。

歓迎夕食会

23日の夜には、APICが主催する歓迎夕食会も催されました。来日している若手リーダーの出身国であるミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国、パラオ共和国の日本大使（一時帰国中）、各国在京大使を含め、国際的に活躍されている方々が一堂に会し、交流を深めました（詳細は左ページをご参照ください）。

施設訪問

また、株式会社東芝府中事業所やバイ

APIC 主催 歓迎夕食会



(夕食会に先立って紹介を受ける訪日団)

滞在中のスケジュール

2/21	招聘記者 到着
2/22	太平洋諸島センター訪問 古屋圭司日本・太平洋島嶼国友好議員連盟会長ほか面会 濱地雅一外務大臣政務官表敬
2/23	築地市場、東芝府中事業所見学 大島理森衆議院議長表敬、国会視察 APIC 主催歓迎夕食会
2/24	バイオエネルギー株式会社、 気象庁、JICA 訪問
2/25	仙台視察：東松島市役所訪問
2/26	仙台視察：石巻復興支援ネットワーク 「やっぺす」訪問
2/27	東京観光

オエナジー株式会社、気象庁など、エネルギーや環境というテーマに関連した施設を訪問するとともに、都内観光や早朝の築地市場視察も行われ、日本について幅広く理解を深めることができました。

東北視察

プロジェクトの後半は東北地方で実施され、東日本大震災後の復興現場を視察し、コミュニケーションづくりなど、復興への具体的な取り組みを視察して廻りました。

インターン生の活躍

本プロジェクトには2名の上智大学のインターン生がアテンドに関わり、1週間にわたるプログラムを補佐しました。インターン生の感想については、「インターン体験記」に掲載しております。



(視察を行う訪日団)

プログラムの2日目にあたる23日にはAPICが主催する夕食会が東京倶楽部にて開催されました。
本夕食会には、マーシャル諸島共和国、ミクロネシア連邦、パラオ共和国の3か国について、在京大使3名と日本から派遣され一時帰国中の我が国特命全権大使3名が一堂に会しました。また、この他にも、太平洋諸国と深く関係のある企業、団体の代表の方々、日本のオピニオンリーダーが出席し、意見交換を行いました。会の冒頭に佐藤嘉恭APIC理事長から招待計画の趣旨を含めた挨拶が行われ、森英介衆議院議員（元法相）による乾杯の挨拶の後、食事を挟みつつ交流を深めました。



(開会のあいさつを行う森英介元法相)



(日本の国会議員と会談を行った若手リーダー)



(握手を交わすパヌエロ氏とAPIC 佐藤理事長)

夕食会の最後には、若手リーダー6名を代表し、ミクロネシア連邦議員のデビット・パヌエロ氏から今回参加してくださった方々へ、感謝の辞が述べられました。そして、これからの日本と太平洋島嶼国とのより一層の友好関係の証として、パヌエロ議員から佐藤理事長にプレゼントが渡されました。
今後、さまざまな分野で互いに協力していただけることを願っています。(松河)

第8回国際協力懇話会



前駐中華人民共和国全権大使 木寺昌人氏

APICは国際協力懇話会事業として、昨今の外交課題・国際情勢をテーマに小規模な講演を開催しています。昨年、モリ前ミクロネシア連邦大統領をゲストに迎えた第7回に続き、この度、8回目となるAPIC国際協力懇話会が、2016年5月30日に東京倶楽部において行われました。講師には木寺昌人前駐中華人民共和国大使を迎え、「駐中国日本大使を終えて」という演題の下、講演が行われました。木寺大使からは、大使就任の経緯から昨今の日中情勢など、ご自身の経験に基づく非常に興味深いお話があり、質疑応答の時間には日本の経済界を代表する約50名の出席者との間で意見交換が行われ、中国を理解する上で有意義な会となりました。



ザビエル留学生

第3期生にMikoさんが決定

APICでは、ミクロネシア連邦チューク州にある、ザビエル高校を対象とした「ザビエル高校留学生奨学金制度」を設けています。2014年に上智大学との間で交わされた教育連携協定に基づき、2016年6月時点で既に2名のザビエル高校卒業生が上智大学に在籍しています。この度、5月18日をもって、第3期ザビエル留学生として、Mikoさんが決定いたしました。Mikoさんからは、「大学では親しい友人をつくり、国際色豊かな環境の中で、多様な文化を学んでいきたい」というメッセージが寄せられています（記事の全文について、下記に掲載）。Mikoさんは、2016年の9月より4年間、上智大学の国際教養学部で勉学に励みます。

ザビエル高校

ザビエル高校は1952年、ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島にイエズス会によって設立されました。4年制の男女共学で生徒数は約200名になります。北大西洋地域で、最も著名な高校で、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国などからも、生徒が集います。学生の学業水準はこの地域において最高水準であり、近年はアメリカで最も競争率の高い奨学金の一つである、「ビルゲイツ奨学金」受給者を多く出しています。過去の卒業生には、モリ前大統領をはじめ、この地域の政界・経済界のリーダーを輩出しています。

What do I intend to accomplish during my university life

Miko Ronquillo

As a Xavierite entering into University as a freshman, I want to be able to further my education and create fond memories of my time in Sophia. Going off to Japan is an unforgettable experience but living in Japan and going to school there are experiences that I intend to make the most out of. During my university life, I intend to accomplish my goal of creating a lot of friendships. To be able to make lasting relationships is one of the things that I intend to accomplish during my university life.

Another thing that I intend to accomplish in Sophia is broaden my knowledge. I love learning and I believe that going to Japan and Sophia would allow me to learn a lot of things. I plan on learning more about other cultures because it is an international school. I intend to be culturally inclined and be able to learn about other cultures while furthering my education.

Finally, I want to be able to grow. Going off to a foreign country and actually living there for four years, I have to learn how to take care of myself and be independent. I want to be able to grow into my own person and learn how to live in the contemporary world.

ご略歴

- 1975年 外務公務員採用上級試験合格
- 1976年 東京大学法学部卒業
外務省入省
- 1991年 アジア局中国課 首席事務官
- 1993年 経済協力局無償資金協力課長
- 1995年 大臣官房兼内閣事務次官
- 1997年 在タイ日本国大使館 参事官
- 2000年 在タイ日本国大使館 公使
- 2001年 大臣官房
在フランス日本国大使館 公使
- 2002年 在ジュネーブ国際機関日本政府代表部
公使
- 2005年 大臣官房審議官兼経済局
- 2006年 兼総合外交政策局 大使（免経済局）
- 2008年 中東アフリカ局アフリカ審議官
兼第4回アフリカ開発会議事務局長
国際協力局長
- 2010年 大臣官房長
- 2012年 内閣官房副長官補
特命全権大使 中華人民共和国駐劄
- 2016年 特命全権大使 フランス共和国駐劄

ザビエル留学生の生活：リサさん

第2期生
リサ・オウエさん
上智大学
国際教養学部1年生

週末は講義で出された課題を済ませたり、翌週の講義に備えて休息を取ったりしています。課題に取り組み際には、寮の2階にある自習室に向かいます。

予定がないときには、レストランで食事をしたり、街に出て遊んだりしています。

例えば、4月29日の夜には、私はメアリーさんと3人の友達と一緒に代々木へ焼肉を食べに行きました。料理はともおいしく、1時間30分の食べ放題でしたが、食事が終わるときには私たちはおなか一杯になりました。食事を終えた時間が早かったので、お店を出た後に駅近くのカラオケに寄り、2時間歌い明かし、とても楽しい夜を過ごしました。

平日でこのように外食しない時は、自分で料理をするか近くのコンビニエンスストアにお弁当を買って行きます。



休日編 平日編

ザビエル留学生の生活：メアリーさん

第1期生
メアリー・ヘレン・モリさん
上智大学
国際教養学部2年生

私が大学で受講している講義は午前の11時から始まりますが、通学に1時間かかるので、普段は朝9時30までには寮を出発します。下のスケジュール表のとおり、講義は午後3時に終わります。

一日の講義が終わると、課題をできる限り終わらせるために午後6時30分まで大学に残って勉強しています。1年生の時に既に取得すべき単位のほとんどを履修し終えているので、水曜日は講義を入れずに空けています。

受講している講義の中には、グループでの発表にあたって、一緒に参加しているメンバーと話し合うことが求められるものがあります。こうした話し合いは時々、週末の授業がない時間に行います。



私たち大学生は勉強などで時間が不規則になるため、食事をするのがいつも遅くなります。周りの人はお弁当が体に良くないと言いますが、マイクロネシアで私たちが食べていたものより絶対に良いですし、美味しいです。

週末さえも寮の外に出ないことも多いですが、次の週を学生としてよりよく過ごせるように、少なくとも課題を終わらせ、講義に備えて充電するようにしています。

休日に寮内で起こる小さなこと1つ1つが楽しく、週末を寮内で過ごすのも悪くないと感じています。しかし、これからは休日に、勉強をする、寝る、コンビニ弁当を食べる、以外に様々なことをして過ごしていきたいと思っています。



	月	火	水	木	金
11:00 ~ 12:30	Development of Japanese Civilization	Field Methods in Cultural Anthropology		Development of Japanese Civilization	Field Methods in Cultural Anthropology
12:30 ~ 13:30	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食
13:30 ~ 15:00	Japanese Government and Politics	Fundamentals of Religion		Japanese Government and Politics	Fundamentals of Religion
15:00 ~ 18:30	自習時間	自習時間		自習時間	

メアリーさんの平日のスケジュール表
 (英語の部分は受講している講義名)

ご寄附のお願い

対象 ザビエル高校卒業生 毎年1名
留学先 上智大学国際教養学部、理工学部など
奨学金 卒業までの4年間の奨学金を寄与

留学生を中・長期的に受け入れるためには、それにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費などかなりの額にのぼることが見込まれます。皆さまからのご協力をお願い申し上げます。

銀行振込先

三菱東京UFJ銀行 本店(店番001) 普通口座 1660339
 口座名 一般財団法人 国際協力推進協会 奨学金募金口
 カナ名 ザイ)コクサイ キョウリョク スイシン キョウカイ
 ※振込手数料はご負担をお願いしております。

皆様のご支援ありがとうございました。

ザビエル留学プログラムは、上智大学の留学生基金の他、皆様のAPICへのご寄附により、2016年6月現在、総額999万8630円お預かりいたしました。

皆様のおかげで、留学生が上智大学で充実した生活を送ることができています。誠に、ありがとうございます。御礼申し上げますとともに、APICは、ザビエル高校の学生支援を通して、国際協力の一役を担うことをお約束いたします。

(雪ヶ谷化学工業の工場内にて撮影)



雪ヶ谷化学工業株式会社 工場訪問

メアリーさんとリサさんは、上智大学ソフィア会の三溝様とともに、茨城県にある雪ヶ谷化学工業つくば事業所を訪れました。

雪ヶ谷化学工業の顧問である坂本光彦より、上智大学に設立されたザビエル留学生奨学金基金に多大なご支援を頂いており、今般、謝意を表すために、留学生の2名がつくばの工場を見学しました。

ザビエル奨学生 最近の活動

大使の声

ジャマイカ
大使館

つながる文化
音楽とスポーツ



駐日ジャマイカ特命全権大使

クレメント・フィリップ・ リカード・アリコック閣下

できました。しかし、ニューヨークを経由するようになると、少なくとも20時間はかかるフライトになりました。この移動時間の長さ、費用の高さが問題を生み出しています。

私たちは日本からの来訪者数を増やすべく、新しく観光ディレクターを迎えるとともに、ジャマイカ国内の観光業界と協力するといった取り組みを行っています。ジャマイカが特にターゲットにしているのは20年、25年前にジャマイカを訪れたことのある方です。ジャマイカの来訪者の60%が以前一度ジャマイカを訪れたことがあるというリピーターです。また、近年では、多くの日本人女性が国外に出ていくという傾向がみられるため、若い女性にも注目しています。ジャマイカと日本が双方に利益が出せるように取り組んでいきたいと考えています。

Q. ジャマイカはなぜ悩まされていると聞きますが、どのような対策がとられているのでしょうか？

A. 現在ジャマイカでは、国家雨水利用政策に基づき、新しく建設する全ての家や商業用不動産に雨水貯留タンクの取り付けが義務付けられ、既存の建物にも取り付けが求められています。以前から住民は自発的にタンクを利用していましたが、政府がタンクの取り付けを求めるようになったのはここ最近です。

また、最近では食糧保障に関心が高まっています。私たちは農業を営む人々に対して援助を行い、彼らの農作物を積極的に消費し、収入を与えるように取り組んでいます。

Q. 日本との文化的な交流について、最近の動向を教えてください。

A. スポーツの分野でジャマイカと日本の関係は強いです。日本がジャマイカのスポーツに関心をもつようになったのは、1988年に行われた冬季オリンピックに初出場したジャマイカのボブスレーチームを元にした映画『クー・ランニング』のおかげでしょう。(ジャマイカは雪は

ありませんが)ボブスレーにおいて最も重要なのは、「素早いスタート」です。ジャマイカは陸上短距離走のポルト選手が代表するように、スプリンターが強いですね。ボブスレーと短距離走は「素早いスタート」が必要であるという共通点があるのです。陸上競技のジャマイカ代表が鳥取県で合宿を行ったときに、施設の環境やホスピタリティーに感動したそうです。そこでジャマイカのウェストモアランド地区と鳥取県が、この3月に協定を結ぶことになっています。これは日本の都道府県とカリブ諸国が結ぶ初の協定であり、とても素晴らしいニュースです。

また、音楽、食文化での交流は増えていくでしょう。毎年東京で開催されるワンラブ・ジャマイカ・フェスティバルはジャマイカと日本の二国間の関係を促進させる代表的なイベントです。大阪でも同様のイベントが開催されています。このように、音楽や食文化を通じてジャマイカと日本の関係は深まっていきたいと思います。

Q. 近年のジャマイカと日本の外交関係についてどのように感じていますか？

A. ジャマイカと日本は外交的に古くからのパートナーであると思っています。1962年にジャマイカは独立し、その2年後の1964年に日本と国交を結び、2014年にはジャマイカと日本の国交樹立50周年を迎えました。このように日本とは長い友好関係があります。近年では2013年にポーシャ・シン普森＝ミラー首相が来日し、昨年に安倍首相がジャマイカを訪問したように、国のトップ同士の会合が盛んに行われており、次の50年を見据えた関係の構築が進められているなど実感しています。

余談ですが、アルファベット順の関係で、国際会議の場においてジャマイカは日本の隣の席にすることが多いのです。席が近いと必然的に会話をする機会も多くなるため、国家間の関係を構築していく上で、実は席次も重要な要因となっているのではないのでしょうか。



ジャマイカ大使館において、特命全権大使クレメント・フィリップ・リカード・アリコック閣下にジャマイカと日本の関係から、文化、経済に及ぶ課題についてインタビューを行いました。聞き手はAPICインターン生の青柳渡邊、松尾。また、高瀬前駐ジャマイカ大使に同行していただきました。

Q. 近年、日本からジャマイカへ向かう渡航者数が減少していることについて、どう思われますか？

A. この問題は時代の変化に関係しています。1990年代、日本が世界の経済をリードしていた時は、アトランタを経由して現在よりも短時間でジャマイカを訪れることが

Q. 最後に、カリブ共同体におけるジャマイカの立ち位置と今後の動向について教えてください。

ジャマイカは現在、カリブ共同体の中で中心的な役割を担っています。それは、1つには、この共同体に所属する国のほとんどは英語話者であり、ジャマイカは西半球では3番目に英語話者の人口が多い国であるということが要因として挙げられます。また、「自由」と「正義」の2つを軸に真剣に考える国民性も影響を与えていると思います。時に「主張が強く攻撃的だ」と言われることが残念ですが・・・

今後も、ジャマイカはカリブ共同体の核として、各国の結束をより一層強くし、問題解決に努めていくと確信しています。【青柳】



【右から松尾(インターン)、高瀬前駐ジャマイカ大使、リカード大使、青柳(インターン)、渡邊(インターン)】

トンガと日本の多層的な交流・連携

トンガ王国大使館において、タニア・ラウマヌルペ・タラフオリカ・トゥポウ特命全権大使にトンガと日本の関係や、女性の活躍に関してお話を伺いました。聞き手はAPIC インタースタッフの松河、松尾。また、高瀬前駐ジャマイカ大使に同行していただきました。

Q. 日本とトンガの関係についてお話しいただけますか。

A. 2015年の7月に、日本の皇太子ご夫妻がトンガのトゥポウ6世国王の戴冠式にご出席されましたね。こうした交流にみられるように、実はトンガと日本の関係は政府レベルの関係以前に、両国の皇室関係に基づいています。例えば、先代のトゥポウ4世国王は、日本を何度も訪れ、トンガに日本の文化を広めました。ですから、トンガの人々にはみな日本に親近感を持っています。日本の皇太子もこれまでにトンガを3度訪れており、国王の葬儀や戴冠式など重要な場面にお見えになっています。

Q. お話に出てきたトゥポウ4世国王について、どのような日本文化をトンガに広められたのでしょうか。

A. 国家間の強く、長い関係はその国の文化を理解しなければ成し得ない、という考えからトゥポウ4世国王はトンガに日本の伝統的な文化を広めました。それが、相撲とそろばんです。そのため、そろばんを世界に広める活動を行っていた大東文化大学の中野敏雄先生にお会いし、そろばん教育のために2人の留学生を日本に送りました。

実は、その2人の学生とは、ラグビー日本代表選手として活躍したホポイ・タイオネ選手とフオムリ・タウモエフオラウ選手です。彼らは、そろばん留学生として日本を訪れ

ましたが、ラグビーの才能が評価され、日本代表に選出されたのです。これは、トンガの人々にラグビー選手として日本で活躍する道を開くものでした。現在、日本のほとんどのラグビートップリーグのチームではトンガの選手が活躍しています。

Q. トンガの留学事情についてお話しいただけますか。

A. トンガには総合大学がないので、奨学金を得ることができれば学生は必ず留学したいと考えます。しかし、残念ながら実際に奨学金を手にする事ができる学生は5%しかいません。

留学先としては、フィジー、ニュージーランド、オーストラリア、そして日本が人気です。現在、日本の大学にもトンガからの留学生は来ていますよ。立命館アジア太平洋大学は有名で、5人の学生が在籍しています。トンガの学生は日本に馴染みがあり、また高校で日本語を教わる学生もいるため、留学先として選びやすいのです。ちなみに、トンガ語と日本語の発音は似ているため、習得もしやすいですよ。

Q. 今後、日本とトンガが協力していくべき分野についてどうお考えですか。

A. まず、これまでの日本のトンガへの災害支援を心より感謝しているということを申し上げます。私たちは地理的な共通点も多い日本から、特に防災に関してともに学んでいきたいと思っています。昨年は仙台で行われた国連防災世界会議において、災害時は水と避難場所の確保が重要になることを話し合いました。

日本からの援助に関して述べると、日本はこれまで水供給システムの導入やソーラーパネルの設置を支援してくれました。そのおかげで水不足の被害はあまり受けなくなりました。

さらに、歯科保健活動を行っている南太平洋医療隊のマリマリプログラムもあります。マリマリとはトンガ語で笑顔を意味します。この活動は、JICAの支援を受け日本のNGOが、歯磨きの仕方をトンガの子供たちに教えるものであり、食生活の変化から生活習慣病が急増しているトンガにおいて、非常に重要な活動です。その他にも、飛行場や総合病院など、日本の援助で作られたものはたくさんあります。

Q. 今日日本でも数少ない女性大使として、トンガのジェンダー事情をどのように感じていますか。

A. トンガでは内閣と国会に女性は一人もいません。一方、会社のCEOの立場にある女性は多いです。これは、トンガの「FAHUシステム」という文化が関係しているかもしれませんが、子どもが生まれた時や結婚するときに、父の姉妹が最も尊敬されるというのですが、この文化のおかげで、女性が社会を引っ張っていくことに抵抗がありません。

しかし、トンガにも問題は多く、政治の世界でも、より多くの女性が活躍することが望まれます。一方、子育ても同時に大切な仕事であり、無視してはなりません。これは、トンガにおいても難しい問題です。【松河】



大使の声

トンガ王国 大使館

駐日トンガ王国特命全権大使

タニア・ラウマヌルペ・
タラフオリカ・トゥポウ 閣下



【右から、松河（インタースタッフ）、高瀬前駐ジャマイカ大使、タニア大使、松尾（インタースタッフ）】



一般財団法人
安全保障貿易情報センター 理事長
(元通商産業省 通商産業審議官)

坂本 吉弘 APIC 理事

私わなかった日本が、経済的な覇権を握ろうとしているという猜疑と恐怖でした。1993年から日米フレームワーク協定が始まり、日本の経済力の源泉であった官民一体のシステムの解体が米側の狙いだったように思います。この時の自動車、同部品交渉も301条(※)による脅しがありました。新しくできたWTO体制で一方的な措置は違法とされたこともあり、初めて「301条を適用するな」と言われ、私たちはWTOの場で争います」と言うことができました。私たちは国際世論に向けて発信し、日本市場で米国と競合するEUに熱心に働きかけました。それが、1995年に決着した日米自動車交渉です。

翌年は、日米半導体交渉でした。協定を延長したいという米側と市場に対する政府介入を終えたい日本側とで対立しましたが、1996年7月で協定は終了しました。この時も沖縄の普天間基地の返還と絡みかけられましたが、官邸の判断で切り抜けられました。このように、通商交渉といえども、アメリカとの交渉は政治レベルの話を負うということ、単純ではありませんでした。

Q. 外交交渉をする上で心掛けていたことについて教えてください。

A. 私はかつて、知り合いのアメリカ人に言われた言葉を心掛けていました。それは、「外交交渉において、相手国の政策をいくら批判しても構わない。しかし、人や組織を批判してはいけない」ということです。何度も交渉していると、どの人が誠実で国益を考えながら公正に発言しているのか、逆に、自分の出世のために交渉を成功させることしか考えていないのか、とわかってくるものです。そういう時に、アメリカの交渉者も背後に政治的なプレッシャーを受けて大変だと感じました。

交渉時は誠実な人と交渉しよう、しっかりとアメリカの国益を踏まえて、愛国心のある人と交渉しようと努めました。日本も日本なりに国益を考えているので、ここは譲つ

てもいい、ここはだめ、と考えているうちに、人間的な対立関係もできてくるし、信頼関係もできてくる。だからこそ、交渉途上で、「相手を理解して発言している」「妥協してもちゃんと中をおさめてくれる」という信頼感に基づいて、外交交渉を進めていたように思いました。それに欧米人は、政策と人間関係の区別をしっかりとっていてクールに処理するように思えます。いくら交渉で衝突しても、交渉がおわるとうまく屈託のない友人のように振る舞います。仕事とプライベートをしっかりと区別しているように思います。

また、愛国心というやや大時代的に聞こえるかもしれませんが、対外交渉をするたびに自分の背後にある産業やそこで働く人々を愛おしむ心が芽生えてきて、国を愛する心がどんどん強くなるのを感じました。苦しくてもう妥協した方が楽だと思ふ時もありますが、それでは日本や日本人のプライドが許さないといい思いが自分を支えていたこともありました。

自分が日本人であるというアイデンティティを考える機会も多く、日本という国が繁栄してほしい、人から尊敬される国であってほしい、と素朴な感情を持ちながら交渉していました。

Q. 学生の頃はご自身の将来についてどのように考えていましたか。

将来の展望といったものは特にありませんでしたが、お金儲けはヘタだといわれていたので、行政官になりました。でも役所で働いているうちに、「国を大事にしなきゃ、プライドをもって、立派な国と思われようになきゃいかんねえ」と自然に感じ始めました。職業意識みたいなものでしょうか。

Q. 今後日本を担っていく学生に向けて一言お願いします。

一つは、20世紀に日本は大東亜戦争においてアジア諸国

1990年代の

日米通商交渉を

回顧して

第1号より、APICの活動を支える理事・評議員へのインタビューを行っております。国際社会の様々な領域で活躍された方々の経験に目を向けることで、APICが今後取り組むべき国際交流の在り方に関して大きな示唆を得ることができると感じています。

第3回となる「APIC役員に聞く」では、坂本吉弘氏(一般財団法人安全保障貿易情報センター理事長)にインタビューをお願いし、通商産業省時代(元通商産業省審議官)のご自身の経験や外交交渉の現場で感じたことなどについてお聞きしました。聞き手はAPICインターン生の松河、科桙がお話を伺いました。

Q. 通商産業省時代、アメリカとの通商交渉を行っていく中で、どのような感想をもちましたか。

A. 通商交渉で感じたことは、それが容易に政治化することです。例えば、日米繊維交渉と沖縄返還交渉がどこまで関連していたかは定かではありませんが、沖縄の返還を円滑に行うために、繊維交渉で日本側が譲歩するパーセプションが日米双方にあったように思います。当時繊維交渉を担当していた私からすれば、「なぜアメリカの理不尽な要求を受け入れなければならないのか」と思いました。でも今考えると、沖縄の返還交渉は戦後の日本にとって決定的に重要な交渉でした。

1990年代にクリントン政権ができた時の国際関係は、アメリカが長年かけてソ連を崩壊させ、冷戦を終えた直後でした。この時のアメリカの理解は、冷戦のコストをに帝国主義的な侵略をして、彼らの平和な生活を乱したという側面を忘れてはいけないと思います。しかし卑屈になることはありません。

一方で、日本のアジア南進が、結果的に19世紀に欧米の帝国主義が植民地化したインドやアジア諸国の独立を促す契機になったことも歴史的な事実です。また、アジアの中でいち早く工業化、産業化して欧米に伍す地位を築いたという意味で、尊敬されます。そういう日本がこれから果たそうとする国際的な役割を、アジア諸国は期待しているところがあると思います。

国内的には格差のない公正な社会を築いて欲しい。「新自由主義」という思想は、欧米でもそろそろ限界を迎えつつあるように思います。日本はもともとみんな平等だという国です。この点は、アメリカのように貧富の格差の激しい社会はモデルにならないと思います。

私たちの若いころと違って、将来にいつも明るい展望を持つことは難しくなっているように思いますが、だからこそ、しっかりと足場を固めて、公平な社会を作っていくかといけないと思います。

日本にきた外国人が一緒に印象付けられるのは、日本のPeopleの素晴らしさです。日本の社会が伝統的に育んできた親切心やお客さんを大事にする態度は高く評価されています。「この地球上に災厄が襲っても、日本民族だけは生き延びてほしい」といった外国の方もいます。日本人であることに誇りを持ってほしいと願っています。【科桙】

※通商法301条

説明：アメリカ合衆国通商法301条のこと。相手貿易国との取引上における不公平な慣行に対して、相手国と協議することを義務付け、それでも解決しない場合の制裁措置について定めた条項。

APIC 春季集中中学生インターンシップ

2016年2月2日～3月1日にかけて、2015年度に新規開講された上智大学の「インターンシップ科目」に基づき、3名の上智大学の学生が、春季長期休暇を利用して、APICのインターンシップに参加しました。

上智大学では、グローバル人材育成に賛同して協定を結んだ企業や国際機関の日本代表部などで就業体験を積み、国際協力に関する知識を深めるためのインターンシップの機会が学生に提供されています。

学生は、長期休暇を利用して約1か月間実習を行い、プログラムの事前事後に行われる講義受講や課題提出を行うことで、2単位が付与される仕組みとなっています。大学で学んだ専門知識や経験をグローバル社会の中でどう生かしていくか、あるいは自分が残りの大学生活で何を学ばべきか、といった気付きを学生に得てもらう目的で、2015年度から新規開講されました。

各企業に派遣される定員数はかなり限られおり、事前に提出した志望理由書や履歴書に沿って、面接が実施されます。選抜された学生は、事前講義でビジネスマナーを学び、国際協力の現場での実例に触れた後、国際協力の実務経験を通して国際協力の分野、構造、意義、課題を理解します。実習終了後にはレポートを提出し、発表やディスカッションを行います。講義や実習では常に能動的に学ぶ姿勢が求められ、将来、グローバル人材としてキャリアを目指す学生にとって、非常に有意義なプログラムとなっています。

APICは、インターンシップ科目「国際協力」分野のインターンシップ先となっており、APICで提供されている実習プログラムは、外国要人のアテンドや大使館



文学部
英文学科3年
科埜まや
しなの

インターン前半期は、事前調査の業務が中心でした。後半期に訪問予定であったアジア開発銀行（ADB）・安全保障貿易情報センターなどの国際機関、2月22日～27日に行われた「若手リーダー招聘」の参加者の出身国であるパナマ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国について、幅広く調査を行いました。様々な領域について調べていく中で、自分の知らない世界がまだまだあるということを実感しながら、日々の業務に取り組みでいました。インターン後半期では、実際にインタビューを行い、ウェブサイトにAPICの会報に掲載する記事を作成しました。また、太平洋島嶼国（パラオ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島）から要人を招く若手リーダー招聘のアテンドを担当し、国会、外務省、衆議院議員会館、気象庁など、日本の政治の中心となる施設を訪問しました。

① ADB訪問や事務所での業務

印象に残っている業務の1つとして、ADB訪問が挙げられます。目まぐるしく動くアジアの経済状況や社会問題に対して、どのような役割を果たしているのか、あるいは、どのようにして開発途上国の発展を促しているのかといった事柄について玉置代表から説明を受け、非常に感銘を受けました。この訪問で得た知識に基づいて、今後は、発展し続けるアジア太平洋地域の経済動向に注目していきたいと思えます。

一方で事務所におけるやりとりでも、国際関係について考える機会がありました。毎週月曜に行われるスタッ

教育連携に係る包括的な協定

Memorandum of Understanding



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY



フミティンゲの際に、佐藤常務理事のお話にあった、「太平洋地域やカリブ地域といった小さい島国は、日本ではあまり注目度が高くないのが現状です。だからこそ、APICが支援して協力関係を活性化させることが大切なのです」という言葉が心に残っています。先進国の中でも島嶼国という共通点を持つ日本は、アジア太平洋地域の様々な問題に対して独自のアプローチを行うことができるという強みを生かして相互的な協力関係を構築していけるのではないかと感じました。

② 若手リーダー招聘

そして最も鮮明に覚えているのは、2月下旬に行われた、若手リーダー招聘のアテンド業務です。太平洋地域の3か国から来日した6名の若手リーダーをサポートするため、全日程のうち前半の3日間、訪問先に同行しました。日本の外交問題、環境問題、防災問題に取り組む様々な企業や



（若手リーダーの国会見学に同行する科埜・左）

訪問、APICが発行する本誌の記事の執筆および編集、また、能力に応じた翻訳作業、電話・来客対応といった一般業務が含まれています。これらの業務を通して、今まで学んできた国際協力に関する知識を生かしながら、太平洋島嶼国やカリブ地域における国際協力の現状と実情について理解することが目標となっています。

インターン生は期間中に実施されたAPICの国際協力事業にも積極的に関わっており、その成果の一部が本会報の記事として掲載されています。

次ページから3ページにわたり、インターンに実際に参加した学生の声を体験記として掲載しています。【科埜】



（佐藤理事長と3名のインターン生）

機関を訪問しましたが、どの訪問先でも、地理的な共通点をもつ太平洋島嶼国と日本の間で、自然災害などに対する課題や技術協力に関して、共通認識を持っていると感じました。本事業は、日本が今後も太平洋島嶼国を支援するパートナーであるという認識を育んでもらう良い機会となったのではないかと思います。

APICは太平洋・カリブ海地域を中心に国際協力を行っているのですが、私はインターンシップに参加するまで、これらの国についてほとんど知識がない状態でした。しかし、インタビューの事前調査やアテンド業務を通して、日本と太平洋島嶼国の関係性や、APICと島嶼国とのかわりについて、その一端を理解できたように思います。

特に多くの地理的な特徴を日本と共有していることから、自然災害について考えさせられました。例えば、フィジー共和国では、昨年洪水によって甚大な被害を受けました。一方、日本は5年前に東日本大震災を経験しただけでなく、最近では火山噴火なども起こっています。こういった自然災害や潜在的な防災リスクに対して、被害を最小限にとどめるためにも、日本が得た技術や知識を共有し、協力体制を強めていくことが重要なのだと感じています。

最後に、APICで経験した様々な業務を通して、国際協力の現状と課題について学んだだけでなく、学生として、社会のマナーや礼儀も学ぶことができました。

この上智大学インターンシップ科目が、APICの活動目的のひとつである「国際協力に関心ある若い世代の育成」の一環であるように、まさにこの1か月間で、国際協力に関して見識がより深まったと同時に、実務を通して以前よりも成長することができました。これも、上智大学とAPICの強い繋がりと、APIC関係者の方々の協力があったからこそだと思っております。この経験を基盤として、自身の将来が実りあるものになるよう、今後も幅広く積極的に物事に取り組んでいきたいと思えます。【科埜】

本ページから6ページにわたり、2016年春季にインターンシップに参加した学生が執筆した記事に掲載しています。上智大学をはじめとする各機関の公式の文章ではないことをご承知ください。



総合グローバル学部

グローバル学科3年

まつかわ はるか

松河晴佳

国際協力推進協会での20日間のインターンシップでは、実に様々な業務に携わらせていただきました。以下、その中で特に印象に残った業務について、また日々の業務から学んだことについて紹介したいと思います。

①ミクロネシア自然保護基金プロジェクト報告書の和訳

最初に担当した業務は、ミクロネシア自然保護基金(MCT)が実施している「クリーンウォーター及び生活改善プロジェクト」の中間報告書の和訳でした。報告書程の分量を和訳するということは初めてでしたが、本プロジェクトの担当者である荒木恵理事に修正をしていただきながら完成させることができました。英文の和訳という一見、国際協力とは関係がないように見えます。しかし、報告書を日本語で読めるように整えることで、プロジェクトの進捗が日本の多くの関係者がアクセスしやすくなります。それにより、次のプロジェクトへの資金が再び提供されるという構造を知り、間接的にプロジェクトを支えているという実感を得ることができました。

②原田親仁大使による早朝講演会への参加

インターン中盤、政府代表兼日露関係担当大使の原田親仁氏による「第322回カントリー情報早朝講演会」に参加させて頂いた。「最近のロシア情勢と日露関係」と題された原田大使からのお話では、講演の数日前に行われた日露次官級協議や今後の日露関係が取り上げられ、まさに私が行った業務は、太平洋若手リーダー招聘の準備と当日のアテンド、外務省訪問、ジャマイカ大使館とアジア開発銀行の訪問の準備、早朝講演会への参加、APICのウェブ・会報記事の作成などです。その中で、特に印象に残った業務とそこから学んだことを3つ紹介します。

①太平洋若手リーダー招聘

最初に行った業務である「太平洋若手リーダー招聘」の事前準備では、ミクロネシア連邦、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国の情報収集を行いました。この業務を通して、太平洋島嶼国と日本の歴史的な関係を知り、今後お互いの協力関係を促進することが大変重要であるということや、それにも関わらず、それらの国々に対して日本人の理解が浅いという事実に気づき、APICの活動の意義やインターンに参加するうえで心の構えを学ぶことができました。

インターンシップ期間後半には、太平洋島嶼国から来日した若手リーダー6名の東京視察に同行する機会を頂き、「国際協力」が行われる現場に立ち会うことができました。若手リーダーが日本の政治家の方々と意見交換をする光景を目の当たりにし、お互いの国の友好的な協力関係を築くうえで、国のリーダー同士が直接対話し今後の方向性を共有することの重要性を実感しました。

また、日本の先端的な技術の視察の中で積極的に質問をする若手リーダーの様子を目にすることで、国際協力の分野で日本が実際に貢献している姿を知ることができました。

に日露外交の最前線を知ることが出来ました。実際の日露外交の現場は、私たちが思い描くような理想主義とは異なる状況にあり、両国の文化的な交流や両国を取り巻く環境が常に外交に大きな影響を与えていることを改めて感じさせられました。

③トンガ大使館訪問 タニア大使へのインタビュー

インターン終盤、トンガ大使館を訪問し、タニア・ラウ マヌルベ・ツポウ特命全権大使へインタビューを行いました。大使にインタビューをするのはもちろん初めてで、少し緊張しましたが、タニア大使が優しくお答えしてくださったこともあり、徐々にリラックスしてお話しすることが出来ました。大使館への訪問はトンガと日本の深い関係を知る上で、非常に良い機会となりました。特に、東日本大震災の時にはトンガは日本に対し、長期的に支援を続けてくれたという事実は、インタビューに向けた事前調査を行わなければ知りえなかったと思います。また、ニュースではあまり報道されないような国々との関係こそ、私たちが市民レベルで大切にしていかなければならないのではないかと考えさせられました。

④地道な業務の結晶

先に挙げた、大使館訪問は様々な活動の中でも目立ち、周りの人から見てもぜひやってみたいと思われるような業務かもしれません。そして一方で、中間報告書の和訳作業などは一見、国際協力とは関係のない、地味な仕事なのではないかと思われるかもしれませんが、私自身も初めはそのように感じていましたが、インターンシップが進むにつれ、国際協力の裏側には地道で根気のいる作業がたくさん隠されていること、そしてそのような表面的には目に見えない準備がむしろ非常に重要であり、不可欠であることを身をもって実感しました。

⑤人と人とのつながり

APICでのインターンを通して、国際協力事業の実施および準備段階における人と人とのつながりが重要であ

(若手リーダーに同行する渡邊・手前右)



しかし、島国であるという地理的状況やエネルギー源の課題などの共通点があったとしても、日本の技術をそのまま太平洋島嶼国で活かせるとは限りません。そのことについては以前から理解していたつもりでしたが、「その日本の取り組みは規模が大きすぎる」「日本と太平洋島嶼国とは人口の規模が全然違う」などの若手リーダーの生の声を聞き、国際協力を行ううえで取り組むべき課題の一つであるという意識が一層高まりました。

また、気象庁を視察した際、担当の方がブリーフィングの中で「気象にも津波にも国境はない」とおっしゃった時に参加者の方が深くうなずいた様子が印象に残っています。ある若手リーダーの方から「気象庁での予報情報の発信は太平洋島嶼国にとって非常に重要である」という意見が聞かれ、自然災害などに対する取り組みや情報の共有を自国だけに限らず世界に広げることも国際協力の一つの在り方なのだと実感いたしました。

と感じられました。事業を実施する中で人と人がつながり、その間に友好関係が構築されれば、それはまさに「国際協力」であるということが出来ます。一方で、準備段階における人と人とのつながりも、国際協力を成功させるためには欠かせない要素です。インターン期間中に、事業の確認や相談、報告のために掛かってくる電話と事務所への来訪者の数が多いことに驚くと同時に、事業に臨む前に密にコミュニケーションをとり、信頼できる関係構築に務めることの大切さを理解しました。これは、社会人になる以前に大学生活においても心に留めておかなければならないことだと感じています。【松河】



(坂本吉弘理事へのインタビューを行う松河右)

②外務省訪問

インターンシップ期間中には、APICの佐藤常務理事の外務省訪問に同行する機会も頂きました。外務省の方と佐藤常務理事による今後の事業についての打ち合わせに同席させて頂いたとき、それぞれの事業に込められた思いやその意義を具体的に知ることができました。打ち合わせの中で特に印象的だったのは、「一つ一つの事業の規模は小さいかもしれないけど、それが積み重なれば大きな効果を生むのではないか」と話されていたことです。国際協力の最前線で働く姿を目の当たりにし、「国際協力で行われていることは必ずしもすぐに成果がでるわけではなく一つ一つの積み重ねが大切だ」という言葉の意味を、実感をもって理解できたように思います。

③ジャマイカ大使館訪問

ジャマイカ大使館訪問の際には、大使へのインタビューを通して、「人と人が直接会って話すことから生まれるもの」の大切さを学びました。訪問する前にインタビューの準備として下調べをし、ジャマイカについての理解を深めたつもりでしたが、インタビューを通じてより一層深く知識を得るとともに、ジャマイカに対して格段良い印象を抱きました。こうした経験を通して、相手と直接行われる対話の影響を実感するとともに、対話を大切にする姿勢は、「国際協力」においても不可欠であると感じられました。

このように、APICでのインターンシップを通して、国際協力においては、「一つ一つ事業の積み重ねを大切にすること」「情報発信を広く行うこと」「直接対話すること」が重要であると実感しました。大学で学んでいる理論を踏まえ、実際の活動を行っている現場にあたることは、国際協力の在り方を考えるうえで不可欠なことであると感じます。また、職員の方々と直接触れ合いながら毎日「働く」という経験は、社会人としての在り方やその責任についても改めて考えるよい機会となりました。【渡邊】

アジア開発銀行駐日代表事務所

玉置 知己氏に聞く

アジア諸国地域の現状とこれからの課題

2月17日、インターン生の活動の一環として、アジア開発銀行（ADB）駐日代表事務所を訪問し、玉置知己氏代表にインタビューを行いました。ここではインターン生が実際に行った質疑のまとめをインターン生の感想を交えて掲載しています。

ADBは、貧困削減やインフラ整備、災害対策などの支援、気候変動、環境問題にも寄与して、アジア太平洋地域の開発途上国の発展を支援する重要な役割を担っています。今回の訪問では、玉置知己代表より、アジア太平洋地域の経済状況に関する説明を受けた後、ADBの概要と役割について、日本との関連と併せて説明して頂きました。日頃、ニュースや新聞では耳にしたことがあるものの、複雑に絡み合う経済状況や国際社会の問題について、国際協力に携わる現場の声を直接耳にすることはほとんどないため、非常に有意義なインタビューとなりました。

ADBとAPICの共通点とは

インタビューを通じて、ADBとAPICは、開発途上国を対象に重要な支援を行っているという点で共通点があると感じられます。一見、国同士の協力関係に基づいた支援を行っているように見えますが、実はミクロな対人関係こそが非常に重要であることに気づかされました。玉置代表は、「ADBは開発銀行として、開発途上国の発展に寄与するために、プロジェクトの経済性だけでなく環境や社会に対する配慮などを含めた質の高い支援を心掛けている」とおっしゃっていました。APICにおいても、互

ミクロネシア自然保護基金

クリーンウォーター及び

生活改善プロジェクト

ミクロネシア連邦ポンペイ島では、飲料水として使われる清流に、住民の汚水、特に養豚小屋からの汚染が流れ込み、環境汚染や疫病発生の原因となっています。

今般、APICでは、平成27年度のAPIC太平洋島嶼国開発協力事業の一環としてミクロネシア地域環境保護計画「クリーンウォーター及び生活改善プロジェクト」を支援したところ、実施主体のミクロネシア自然保護基金（MCT）から、実施状況の中間報告がありました。インターン生は本報告書の翻訳に携わり、その内容をまとめました。

ミクロネシア自然保護基金報告書

本プロジェクトは、ミクロネシアのポンペイ州において、養豚場からの排泄物等が河川に流出し、清流を汚染する元凶となっている状況に対するパイロット・プロジェクトとして採択されました。具体的な内容としては、養豚場の排泄物を含んだ敷料を乾燥させて汚染水の河川への流出をストップし、同時に敷料から堆肥を作って肥料として使用し、余剰分を販売しようとするものです。この技術は、乾燥敷料技術システムと呼ばれるもので、改装された豚舎から排出された廃棄物が収集、貯蔵され、6か月後に堆肥として生まれ変わるといった仕組みとなっています。堆肥は農家が肥料として使用するほか、余剰分は売却されて、新たな収入源となります。（APICは、豚舎改装に必要な資材購入および豚舎改装に必要な資金を支援します。）

いの信頼関係があつてこそ、様々な事業を展開することができます。その「信用」に基づき、先進国である日本は開発途上国に提供できる技術伝達やシステムづくりを支援します。これこそが国際機関であるADBやAPICの役割であり、共通点であると考えます。

ADBが取り組む最大の課題、アジア地域の貧困

ADBは、設立当初から貧困問題を最大の課題として扱っており、貧困率が大きく低下しました。現在でも、インクルーシブ・グロースなど、貧困に配慮した支援を実施しています。玉置代表は、「貧困問題と一言で表せても、具体的にアプローチする際には、貧困問題を解決するため



アジア開発銀行駐日代表事務所代表 玉置知己氏

MCTは、昨年9月より、ポンペイ州政府と協議を開始し、同政府の支援も得て、養豚場からの排泄物の流出で河川の水質汚染が深刻となっているポンペイ州サラダック村の3つの豚舎をプロジェクトの対象として決定、既にそれぞれの養豚場で工事に着手しており、2016年央には完成予定となっています。



プロジェクトによって改装が行われた豚小屋の様子

の手段は多様です。ADBでは、アジアの開発途上国におけるインフラ整備や、防災リスクのマネジメントなどADBの様々なオペレーションにおいて貧困削減に配慮するようになっています」とおっしゃっていました。「貧困」を「貧困率」で視るのではなく、貧困人口、更に自然災害や経済的ショックに対して脆弱な人口を見据えて真摯に向き合っていくことが必要です。また、「将来、いわゆる貧困地域にあたる開発途上国の国民が、自力で互いに協力して生きていけるような『ベース作り』をすることが一番重要だ」という玉置代表のお言葉を聞いて、ただ資金援助などのハード面だけではなく、ソフト面の支援こそが重要であるという国際協力の本質を考えさせられました。

ADBが日本に期待すること

ADBは、あらゆる面で日本に期待を寄せています。日本は技術面や科学面におけるレベルが高く、公害問題や自然災害リスクへの対応など、現在アジア太平洋地域の途上国が直面する問題を乗り越えてきた経験があります。そのため日本が得た技術や知識を、アジア太平洋諸国に還元し、同地域の様々な問題を解決することが重要です。それゆえ、今後さらに、ADBはこの地域に対する日本の貢献に期待をしています。

銀行としてのADBの役割、国際機関としてのADBの役割の両側面に触れながら、アジアの貧困問題はもちろん、経済面の問題にこれからのようにアプローチしていくのか、そして、今最優先事項として進めている活動は何であるかを中心にお話し下さいました。そして最後にはインターン生からの質問にお答え頂きました。インタビューは、約1時間にわたり行われました。

これからも成長を続けるアジア地域ですが、一方で貧困問題やインフラ整備などの課題も残されています。これからADBは具体的にどのような方策をとっていくのか、どのように解決の方向へと導くのかなどのADBの動向に注目していきたいです。

本プロジェクトは、住民が自分の目でその成果を確認できるものであり、住民の廃棄物汚染に対する意識を高めることに貢献できると考えられます。今後、GEF（世銀環境基金）などの支援を受け活動をより広範囲に広げていきたいと考えています。



今後改装が予定されている豚小屋の様子

APIC 早朝講演会のご案内

毎月1回開催されるAPIC カントリー情報早朝講演会では、外務省幹部、在外大使などを講師として、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。

現職の外務省局長、一時帰国中や退官直後の大使から、いま実際に進行中の国際情勢のテーマについて質の高い話を聞くことができる機会として、参加者からの評価は極めて高いものがあります。なお、APIC 維持会員の皆様には自動的にご案内するほか、参加をご希望の方にもご案内を行っております。詳細については、裏表紙に記載しております連絡先にて、APIC 事務局にご照会ください。



第326回 外務省 前外務審議官(経済) 長嶺安政氏
「本年のサミット並びに国際経済における日本の課題」

最近の講師とテーマ

- 第326回 2016年6月16日 外務省 前外務審議官(経済) 長嶺安政氏
「本年のサミット並びに国際経済における日本の課題」
- 第325回 2016年5月19日 前駐シンガポール共和国特命全権大使 竹内春久氏
「シンガポールの発展と日本」
- 第324回 2016年4月21日 前駐イラン・イスラム共和国特命全権大使 羽田浩二氏
「最近のイラン情勢」
- 第323回 2016年3月17日 前駐ドイツ連邦共和国特命全権大使 中根猛氏
「最近の日独関係、ドイツをめぐる諸問題、EUの展望」
- 第322回 2016年2月18日 外務省 政府代表兼日露関係担当大使 原田親仁氏
「最近のロシア情勢と日露関係」
- 第321回 2016年1月20日 外務省 外務事務次官 齋木昭隆氏
「2016年の日本外交 課題と展望」

※講演時の役職を記載しています。

平成28年度収支予算

2016年6月14日に開催された理事会及び評議委員会において、平成28年度(2016年7月1日から2017年6月30日まで)の「収支予算」及び「事業計画」が承認されました。詳細は下記の通りです。

(単位:円)

収入の部		支出の部	
1. 収入	69,030,000	1. 事業活動支出	103,498,800
a. 基本財産運用収益	30,000	a. 太平洋島嶼国開発協力事業(8件)	27,700,000
b. 特定財産運用収益	45,000,000	b. 日・カリブ友好協力事業(7件)	46,900,000
c. 維持会員会費	20,450,000	c. 早朝講演会事業	5,100,000
d. 受取寄付金	3,000,000	d. 留学生奨学金事業	2,900,000
e. 雑収入	550,000	e. 事業間接費	20,898,800
		2. 管理費支出	16,233,200
		a. 役員報酬・給与手当	7,640,000
		b. その他の管理費	8,593,200
当期収入合計	69,030,000	当期支出合計	119,732,000
前期繰越	491,000,000	次期繰越	440,298,000
合計	560,030,000	合計	560,030,000

⑦カリブ気象水文研究所訪日支援計画
気象水文サービスの改善及び気象水文に関する研究・啓発を行っているカリブ気象水文研究所(CIMH)の訪日に際して支援を行うとともに、エネルギー関係企業や上智大学大学院地球環境研究科の紹介を通じてこれを支援する。

⑧国際協力懇話会
同様の外交課題・国際情勢等をテーマに小規模の懇話会(東京、及び、地方)を実施する。

⑨留学生奨学金事業
ザビエル高校(ミクロネシア連邦チューク州)には、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ、マーシャル諸島の優秀な生徒が入学する。卒業生には、ミクロネシア連邦前大統領を始めとしてそれぞれの国のリーダーが輩出している。このような事情もあり、APICが上智大学と協力して開始した本件「留学生制度」については、3カ国の首脳の間で極めて高い評価が与えられている。

本年秋から第3期生の入学が予定されており、APICとしては今後募金活動を積極化するとともに、留学生に対する生活費等の支給を含め留学の支援を行うべく。

平成28年度事業計画

【太平洋島嶼国開発協力事業】
太平洋島嶼国の信頼関係を構築し、友好関係の一層の推進を図るため、太平洋島嶼国の環境、エネルギー及び観光の分野における開発協力事業として、次のプロジェクトを実施する。

①太平洋諸島大学生招待計画
太平洋島嶼国の大学生を我が国に招待して、短期間の研修を行い、我が国の環境問題等についての理解を深める。上智大学と連携し、西インド諸島大学学生招待計画と同時に実施する。

②太平洋記者招待計画
我が国の環境保護、防災、エネルギー利用などについて理解を深め、もって我が国の現状についての広報を行う。日本フォーリンプレスセンターと連携し、カリブ記者招待計画と同時に実施する。

③太平洋若手リーダー招待計画
太平洋島嶼国の若手リーダーを我が国に招待して、我が国のオビニオン・リーダーとの会談を行うとともに、環境、エネルギー、観光に関連する視察を通じて、我が国についての理解を深める。

④環境セミナーの開催
我が国からオビニオン・リーダーを太平洋島嶼国に派遣して、我が国が取り組んでいる環境問題等につき講演を行い、対日理解を深める。

⑤ミクロネシア短期大学との協力促進
太平洋島嶼国の大学と我が国大学との協力関係につき、一層の促進を図る。

⑥ミクロネシア短期大学の短期留学制度
ミクロネシア短期大学の学生を招待し、麗澤大学及び上智大学短期大学部において

⑦ミクロネシア地域環境保護計画
パラオ、ミクロネシア、マーシャル諸島、グアム及び北マリアナ諸島の3カ国2地域は共通の環境政策「ミクロネシア・チャレンジ」を担当する「Micronesia Conservation Trust」より提案のあった、「ボンベイ州(MCT)より提案のあった、「ボンベイ州」サプワフィック島における気候変動に対応できるコミュニケーションプロジェクト」の支援を行う。

⑧ミクロネシア写真展
上智大学と連携し、ミクロネシア連邦の豊かな自然、文化を紹介するための写真展を開催する。日本国内におけるミクロネシア連邦への広い理解、知名度向上を目的とし、両国文化交流の更なる促進、各種活動への支援者の拡大を図る。

【日・カリブ友好協力事業】
カリブ諸国の信頼関係を構築し、友好関係の一層の推進を図るため、カリブ諸国の環境、エネルギー及び観光の分野における開発協力事業として、次のプロジェクトを実施する。

①西インド諸島大学学長招待計画
西インド諸島大学の副総長(実質的なトップ)、各分校(モナ校、ヤント・オーガステイン校、ケープ・ヒル校)学長3名を我が国に招待して、我が国大学との意見交換会、環境、エネルギー、観光に関連する視察を通じて、我が国についての理解を深める。実施に当たっては、外務省及び上智大学と協力を行う。

②西インド諸島大学学生招待計画
西インド諸島大学各校(モナ校、ヤント・オーガステイン校、ケープ・ヒル校)の大学生を我が国に招待し、短期間の研修を行い、我が国の環境問題等についての理解を深める。上智大学と連携し、太平洋諸島大学生招待計画と同時に実施する。

③カリブ諸国記者招待計画
カリブ諸国(ジャマイカ、トリニダード・トバゴ)の有力記者を招待して、我が国の環境保護、防災、エネルギー利用などについて理解を深め、我が国の現状についての広報を行う。実施に当たっては、外務省及び日本フォーリンプレスセンターと連携し、太平洋記者招待計画と同時に実施する。

④カリブ若手リーダー招待計画
カリブ諸国の若手リーダーを我が国に招待して、我が国のオビニオン・リーダーとの会談を行うとともに、環境、エネルギー、観光に関連する視察を通じて、我が国についての理解を深める。実施に当たっては、外務省と協力を行う。

⑤環境セミナーの開催
我が国からオビニオン・リーダーをカリブ諸国に派遣して、我が国が取り組んでいる環境問題等につき講演を行い、対日理解を深める。

⑥カリブJET環境レクチャー
我が国の各地で活躍するカリブ地域のJETプログラマー(語学指導者を行う外国青年招致事業)参加者を東京に招待し、同地域と我が国が共通して抱える環境問題に関連した講演会を行う。実施にあたっては外務省、在京ジャマイカ大使、および上智大学と協力する。



APICでは維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には毎月開催される外務省高官、大使による **APIC カントリー情報早朝講演会** を自動的にご案内するほか、参加をご希望の方にもご案内を行っています。詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

場所 ホテルオークラ東京 会議場
時間 午前8：30～10：00（朝食付き）

APIC 事務所 (TEL) 03-5577-2900 (FAX) 03-5577-2901
黒坂 (E-mail) apicinfo@apic.or.jp

■発行人
佐藤嘉恭

■発行日
平成 28 年 7 月 1 日

■発行所
一般財団法人 国際協力推進協会
〒 101-0054
東京都千代田区神田錦町 3-15-6
名鉄不動産竹橋ビル 7 階
TEL : 03-5577-2900 / FAX : 03-5577-2901
MAIL : apicinfo@apic.or.jp

■編集長
芳賀達也（理事）

■副編集長
小原和樹（早稲田大学大学院）

■編集：APIC インターン生
松尾彩花（国際基督教大学）
青柳昌樹（麗澤大学）
小山貴大（早稲田大学）
科埜まや（上智大学）
松河晴佳（上智大学）
渡邊咲樹（上智大学）